

トウキョウサンショウウオ調査10周年記念

レンジャー活動で、トウキョウサンショウウオの生息状況調査や保全活動に関わり10年が経ちました。私にとって、可愛らしいサンショウウオの仲間とは縁があり、トウキョウサンショウウオはあきる野を訪れるようになったきっかけでもあります。

しかし、その保全を始めたら、簡単ではなかったことがわかりました。一方、生息状況の向上に繋がった場面もあり、意味のある活動であることを実感しました。



あきる野のサンちゃん トウキョウサンショウウオは、多西村（現在のあきる野市）で初めて採取された個体により同定されました。関東地方にのみ分布する小型サンショウウオで、土地利用の変化や開発などにより生息場所や個体数は激減してしまいました。

しかし、あきる野は東京都の中で最も多く個体群が残るエリアの一つであり、里山環境の代表的な生き物となっています。これらの理由で、あきる野のイメージキャラクター「森っこサンちゃん」が誕生しました（タイトルの右側イラスト）。春は産卵の時期で、水場に集まる数多くのトウキョウサンショウウオを現在も見るすることができます（上写真、トウキョウサンショウウオとその卵のう）。

トウキョウサンショウウオの生息状況 毎年、トウキョウサンショウウオの生息状況を把握するため、市内の産卵状況の確認を行っています。東京都周辺での絶滅が特に心配されていますが、近年は回復の傾向にあるエリアもみられます。都内に生息する個体のうち約1/3が市内に生息しているとみられ、森林レンジャーのほか、横沢入で活動されている西多摩自然フォーラムや、各地区の市民団体などの保全活動により、成果が表れているといえます。

その中、2020年は新型コロナウイルス感染症の影響による情報不足、2021年は冬～春の厳しい干ばつの影響により、ここ2年の産卵は再び減少しました。他にも、外来種やマニアによる採取の被害は歯止めがきかない状態で、継続的な被害が目立つ場所がみられています。

あきる野市・トウキョウサンショウウオの産卵（卵のう数）の変動（平成23年～令和3年）

地区又はエリア	H23年	H24年	H25年	H26年	H27年	H28年	H29年	H30年	H31年	R2年	R3年
秋川丘陵/網代	-	59	78	30	29	25	21	67	27	26	33
五日市周辺南部 (高尾/小和田など)*	64	59	190	333	203	202	195	151	223	155	243
五日市周辺北部 (入野/小机/三内など)*	720	645	1,379	1,109	1,261	1,247	955	1,647	1,668	428	969
菅生/草花丘陵*△	16	75	132	77	249	311	225	181	246	293	169
その他	-	51	69	80	22	10	8	64	79	17	10
あきる野市全域	800	889	1,848	1,629	1,764	1,795	1,404	2,110	2,243	919	1,424

* 保全が行われている主な地区又はエリア

△産卵場所の減少が目立つ地区又はエリア

赤字：内部調査、または外部報告分不足の年

謝辞：トウキョウサンショウウオ研究会、西多摩自然フォーラム、小峰ビジターセンター、西秋川衛生組合や市民の多くの方々のご理解やご協力により情報が寄せられています。同様に、これらのご活躍によりトウキョウサンショウウオの保全活動が進んでいます。



環境の重要性 トウキョウサンショウウオは標高の低い丘陵地帯の谷津田や湧水地などの周辺に生息します。水場周辺に隠れ場となる森林や林が存在する豊かな自然環境を、産卵場所として必要とします。コナラなどの雑木林は理想的な場所と言えるため、このような環境の保全は重要だと考えています。



サンちゃんの仲間 トウキョウサンショウウオが生息する場所には、他の両生類や水生生物も生息しています。生態系においてこれらの生き物は重要な役割を果たします。特に春は、このような生き物を餌として必要とする捕食者が多種いるため、点在する水場環境の保全が生物多様性の向上に繋がります。(写真:カエルを運ぶサシバ)



外来種とのメリハリ 主に住宅街や河川から低山地帯を中心に、自然に大きなダメージを与えている外来種がたくさん生息しています。体重数グラムのアメリカザリガニの子どもから、約10キロにもなるアライグマの成獣と幅広く、在来種を絶滅をさせてしまう存在になります。動物の売買は簡単にできるグローバルな世界の反面に、駆除しきれない程の外来種の多さにより対策の困難さをよく実感できます。

整備している産卵場所で罟によるアライグマやハクビシンの捕獲数はこれまでに70頭を超えています。そして、市全体でも1000頭以上が捕獲されましたが、まだまだ潜んでいます。

(左写真) アライグマによる産卵場所の被害をセンサーカメラや痕跡でよく確認していたある日、動きが鈍く、頭部に凹みがみられる個体を発見しました。噛まれてから逃げた個体でしょうか…。このサンショウウオは、恐らく長く生きられなかったと思われます。

やはり、水場が一番重要! 外来種問題やマニアなどによる採取問題が目立つ時代になった上、土地利用の変化による環境消失は最も重大な問題です。

トウキョウサンショウウオの産卵できる場所が大幅になくなってきた以上、トウキョウサンショウウオを存続させるために産卵場所を整備し、復活させています。

湧き水などがあつた場所の周辺を掘ると、魔法のように水が再び湧き、数年以内にトウキョウサンショウウオなどの両生類や水生生物が戻ってきます。この様に、小さな湧水や井戸などを守り続けければ、簡単にトウキョウサンショウウオなどが存続できると思います。

(右写真) 市民の方と協働で掘った池の様子。管理が大変な時もありますが、毎年この場所から生まれる新たな小さな命は数えきれないほどです(右下に小さく、ミズを食べるトウキョウサンショウウオの幼生)。

